

ケアマネジャーの真の価値を伝え 次世代に向けた未来像を描く 『ケアマネジャーへのメッセージ』

介護支援専門員創設から25年の節目。ケアマネジャー第1期生であり、現在、株式会社やさしい手で経営企画部の顧問として、総勢300名以上のケアマネジャーをスーパーバイズしている岡島潤子さんが、これまでの経験からケアマネジャーに必要な知識と、エールを送る。

1. 挑戦し、学び続けた30年

今回は、大きな時代の変化の中で、今ケアマネジャーが押さえておきたい事項を、皆さんと考えたいと思います。

ケアマネジャーも高齢分野だけではなく関連制度等や世界の動向まで、広い視野で見ていくことが求められています。専門性を高めると同時に変化する時代と共に歩む姿勢が大切です。

では少し寄り道になりますが、私の体験を振り返りながら、未来を探りましょう。

■私の仕事始め 50歳からの就職

私はケアマネジャーの第1期生で、介護保険制度開始時から現場に入り介護保険と共に歩んできました。

でも、実は私は50歳になって初めて就職したのです。

大学を出た時就職しなかったのに、父が許可してくれませんでした。大学の受験の時も、私が望んだ法学部や経済学部も父から許可が出ませんでした。そんな学部に行ったら嫁さんにもらってくれないよと、文学部に行くように言われたので文学部に入り、専攻は社会学にしました。

私は母の40歳の時の子で、4人兄弟の末っ子。小学校時代は「触るとピーコちゃん」とあだ名が付けられたほど、すぐ泣き子だったのです。中学になって一年発起して、3年間皆勤賞も取り成績もトップに近くなりました。強くなったようですが、それでも、大学受験も就職もこんな状態で自分の意思は通せていなかったのです。時代を感じますね。

大学卒業して1年目に結婚し専業主婦で半世紀がたちました。2人の子供も

社会人になり、今後どうすると考えた時、「働きたい」と思いました。

就職先は、家から1駅先の駅前の億ションの有料老人ホーム。ケアスタッフと生活相談員として働き始めました。連帯保証人になってくれた主人と友人から、辛いことがあっても、3か月は続けるようにと、念押しされてのスタートでした。毎日看護師さんと一緒に動き、看護・介護双方から意見を出し合いました。隣の連携病院とは、毎週会議があり医療側との意見交換に参加させてもらいました。

介護福祉士と一緒に夜勤もさせてもらいました。まるで自分の今後のリハーサルのような感じでした。海外の研修（オーストラリア）にも参加させていただき、Aキヤットという、地域包括ケアシステムのような制度も学んできました。

ここでの7年間は私にとって医療と介護の連携・協働を実際に見て、高齢者の生活を細かく観察する原点となりました。

■ケアマネジャーになり、やさしい手に入職、新宿での学び

誰にも、初めてはある。恐れずに挑戦しよう！ただし、確実に実践できるように事前準備や復習の習慣を身に着けること。

その後、ケアマネジャーとして在宅での支援を望み、1999年9月、今も所属する株式会社やさしい手に入職。新宿担当になり新宿居宅介護支援事業所の立ち上げまですることになりました。

私は新宿を混雑したにぎやかな街だと認識していましたが、訪問や認定調査に行くようになり、静かな住宅地もあるのだと知りました。そこで、地域を知る



執筆 ▶

岡島潤子

主任介護支援専門員、社会福祉士
一般社団法人 東京ケアマネジャー実践塾 理事長
株式会社 やさしい手 経営企画部 顧問 居宅介護支援事業 スーパーバイザー

1942年生まれ、慶応義塾大学文学部卒業(社会学専攻)。1998年、ケアマネジャー第1期生となり、1999年に株式会社やさしい手に入職。同社初の居宅介護支援事業部を創設。現在は同社経営企画部の顧問、厚労省の老健事業の委員や日本ケアマネジメント学会の代議員、各種研修講師、一般社団法人 東京ケアマネジャー実践塾の理事長として、次世代の育成に尽力している。「八訂 介護支援専門員実務研修テキスト」「新訂 居宅サービス計画書 作成の手引〜適切なケアマネジメント手法の導入と活用〜」(長寿社会開発センター)等、執筆多数。